

【特集】李登輝前総統来日!!

日台の絆を強めた思索と感謝の旅 日の丸と台湾旗が出迎え見送った六泊七日の全行程

理事・青年部部长

早川 友久
はやかわ ともひさ

千切れるほどに打ち振られる日の丸と台湾旗、コンコース

に響き渡る万歳三唱、「蛍の光」の合唱に見送られ、李登輝前総統は新年一月二日、関西国際空港から帰台した。平成十三年（二〇〇一年）春四月、心臓病治療のために来日されてから三年八カ月ぶりの訪日。メディアなどから「思索の旅」「感謝の旅」とも称された、その六泊七日を振り返る。

【十二月二十七日】

名古屋空港では五百人が出迎え

午後六時四十四分、李氏一行を乗せた日本アジア航空EG二八四便は、定刻よりやや早く名古屋空港に到着した。

李氏と曾文恵夫人、故人となった長男の夫人・張月雲さん、ロンドン留学から台湾に戻ったばかりの孫娘・李坤儀さん、友人の彭栄次夫妻、主治医らの一行を奉迎したのは、全国から駆けつけた五百人を超える日本人、在日台湾人の大群衆で

ある。

李氏が空港関係者専用の出入口から姿を現すと、待ち構えていた人々から一斉に歓声が上がリ、李氏はソフト帽を振って歓声に応えながら車に乗り込んだ。

夜の帳が降りて満月が浮かぶ寒空の下、歓声と一斉にたかれたカメラのフラッシュによって、沿道に待ち受けていた人々の期待はいやがうえにも高まる。李氏の乗り込む黒塗りの車が現れるや、大歓声とともに小旗が打ち振られ、「李登輝先生、万歳」「台湾万歳」の大合唱。李氏はわざわざ沿道側に座り、奉迎の人々に手を振って笑顔で応えた。

この日、名古屋空港に集まった報道陣は、台湾から随行のメディアを含めおよそ百名。愛知県警は二百五十名の警察官で警備に当たり、「現職でない外国要人では異例」（警備部）の手厚い態勢を敷いた。

また、出迎えの中には、交流協会の高橋雅二理事長、J R

東海の葛西敬之^{かさいのぶゆき}之会長、そして李氏が敬愛する八田與一^{はったのいち}氏のご令息である八田晃夫^{はったてるお}氏ご夫妻の姿もあった。当夜、一行は名古屋マリオットアソシアホテルに投宿した。

〔十二月二十八日〕

名古屋城で留学生たちと遭遇

来日から一夜明け、午前中はホテルにて櫻井よしこさんら日本の友人たちと歓談。

午後、名古屋城を見学。天守閣から、陸軍少尉として終戦を迎えたかつての駐屯地を眺め、「すっかり変わったね」と感慨深げに洩らした。また、孫娘の李坤儀^{きんぎ}さんに、戦国時代の武将、徳川家康や豊臣秀吉について熱心に説明していたという。このとき、



名古屋城を散策(12月28日)

前夜、出迎えに東京から駆けつけた在日台湾婦女会の張信恵・事務局長や留学生たちと遭遇し、李

氏は帽子を取ってにこやかに挨拶した。

夕刻、徳川家康の遺品を展示する徳川美術館を見学。接遇のため、東京から徳川家二十二代当主・徳川義崇氏が駆けつけた。名古屋マリオットアソシアホテル泊。

〔十二月二十九日〕

八田氏の資料提供を申し出

一行は午前八時五十六分名古屋発の「しらさぎ三号」に乗車、金沢へと向かった。昼前に到着した金沢駅頭では、三百人を超える群集が日の丸と台湾旗で一行を迎え、黒山の人だかりに気付いた李氏は、ハッとした表情の後、帽子を取って深々と一礼した。

一行は、八田與一氏の胸像も展示されている「市立ふるさと偉人館」を見学。李氏はここで、案内役の「八田技師夫妻を慕い台湾と友好の会」代表世話人で事務局長の中川外司^{なかがわとしまし}氏に「せっかくの展示なのに、残念なのは八田氏の資料が少ないこと。台湾は資料を提供できるので、この方面でさらに交流を行いたい」と提案している。

中川氏らと昼食をとった後は、日本三大庭園にあげられる兼六園を散策。雪交じりの寒風吹き荒ぶ中にも、美しい庭園を目にした李氏ご夫妻は満足気に微笑んでいた。

また、陶芸家の大樋^{おほひ}長左衛門^{ちやうざゑもん}氏の窯元を訪れ、手ほどき

を受けながら、へらで茶碗に「誠実」「和」の文字を熱心に彫り付けるなどして楽しんだ。その後、この茶碗は石原慎太郎都知事に届けられたという。

当夜は、和倉温泉の名門旅館「加賀屋」に投宿。一行は加賀屋グループ会長の小田禎彦おだのぶひこ夫妻と長女、孫娘の三代の出迎えを受けた。盛大な歓迎の様子を目の当たりにした日本人客は、「李登輝さんと同宿なんて、この上ない光栄なことだ」と口々に語ったという。

【十二月三十日】

感極まった案内役の名誉館長

本来ならこの日は和倉温泉から特急に乗って石川県を離れるはずだったが、李氏の強い希望で急遽、西田幾多郎記念哲学館の見学と墓参、八田與一氏の生家訪問が組み込まれた。

午前、かほく市内の石川県西田幾多郎記念哲学館を見学。

『善の研究』を愛読書とする李氏は、展示された直筆の書などに見入り、大阪大学教授で名誉館長の大橋良介氏の説明に熱心に耳を傾けていた。また、ここで李氏は自らの政治思想と西田哲学との関連についてとうとうと語り出し、大橋名誉館長とのやり取りには難解な哲学用語などが飛び交ったそうだ。「思索の旅」といわれる所以である。

案内を終えた大橋名誉館長は、感極まった様子で「政治家

でこれだけ哲学を理解されている方は珍しい。スケールの大きさを感じました」と語っている。

その後、八田與一氏の生家を訪問し、八田氏の兄の孫である八田守ご夫妻の歓待を受けた。李氏は仏壇の前で会釈し、八田夫妻の遺影を感慨深げに眺めたという。午後、鉄路で名古屋へ戻り、名古屋マリオットアソシアホテル泊。

【十二月三十一日】

恩師と六十年ぶりの再会

初めての乗車となる新幹線のぞみ一〇一号で一路京都へ向かう。みぞれ混じりの雨が降る中、農学部が当時のまま残っている母校京都大学を訪れた李氏に対して、京大当局は事実上の門前払いを喰わせた。

事前に訪問の旨を伝えていたにも拘らず、京大側は「大学自治法」を盾に、李氏の警護のため随行する警察官の入構を拒否、学内外では中国人留学生によるデモも行われており、安全を憂慮した李氏側が入構を取り止めたかたちだが、京大が李氏の訪問を拒んだも同然である。

戦前、政治的圧力から一教授を護るため、教授ら三十九名が抗議の辞職をした「滝川事件」の精神をもはや京大は持ち合わせていない。訪問の数日前に中国政府（大阪総領事館）が、京大に対して「李氏を訪問させるな」と脅迫していたと「台

湾日報」は報道しており、京大はそれに屈してあっさりと「大学の自治」を捨て去ったようだ。

母校から冷遇を受けた李氏は、車中から時計台を眺めることしかできなかった。

*

銀閣寺の見学後、李氏は「哲学の道」を散策し、京大時代の恩師である柏祐賢氏（京大名誉教授）の自宅を訪問。柏氏は、李氏が京大農学部在学当時の助教授で現在九十七歳、師弟は晴れて六十年ぶりの再会となった。

柏氏は近年、健康がすぐれず、度重なる李氏への訪日妨害に対し、何も手助けしてやれないことに心を悩ませており、「もし自分が死んだら、その弔問を口実にして李登輝さんが来日できるかもしれない。葬儀参列となれば日本政府も無下にはできないだろう。私が死んだらすぐに李登輝さんに知ら

せるように」と周囲に漏らしていた。

これを伝え聞いた李氏は非常に感動し、厳寒の京都に恩師を訪ねることを約束したという。

「仰げば尊しわが師の恩、もういつぺん会えると思わなかった」（柏氏）、「生きているのは柏先生だけ、会えてよかった」（李氏）。両氏の短い言葉に、六十年の時空を越えた師弟愛があふれ、一時間の歓談中ずっと李氏の膝に手を置く柏氏の姿が万感の思いを表していた。

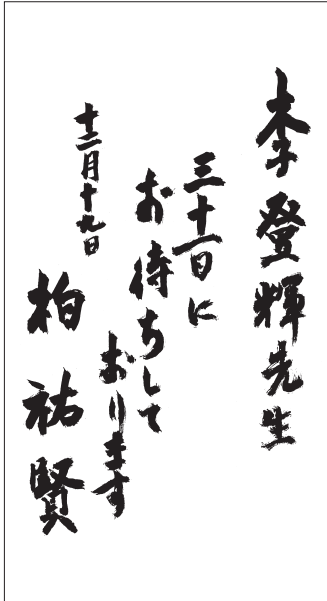
昼はホテルオークラにて、京大教授で本会副会長の中西輝政氏らと昼食。夕刻、鉄路で琵琶湖東岸の湖北町へ向かい投宿。夜はテレビで紅白歌合戦を鑑賞し、日本の年の瀬を楽しんだ。

〔平成十七年一月一日〕

日本語で「おめでとうございます」

日本で新年を迎えた李氏一行はおせち料理を楽しんだ後、滋賀県高月町の渡岸寺に初詣。集まった近所の人々に対し、李氏は「おめでとうございます」と日本語で挨拶した。観音堂に安置されている国宝の本尊、十一面観世音菩薩を見学、住職から寺の由来などを聞いた。

李氏は松尾芭蕉の墓がある義仲寺（大津市）の見学を希望していたが、あいにく前夜の降雪のために交通事情が悪く、



恩師の柏祐賢氏が来日直前に揮毫した李氏へのメッセージ

予定を一部断念し、車で京都へ戻った。

【二月二日】

関空では「蛍の光」で日台六百人がお見送り

日本滞在最終日となったこの日午前、大西真興おおにし けんこう執事長の案内で清水寺を見学した後、西本願寺大谷本廟（京都市東山区）に眠る司馬遼太郎氏のお墓を参拝。その名著『台湾紀行』で李氏の「台湾人に生まれた悲哀」という言葉を紹介し、日本に広く台湾と李氏の存在を知らしめたいわば盟友の司馬氏に花束を手向けた。

この司馬氏の墓前で、李氏は報道陣に対し、日本語で今回の訪日についての感想メッセージを読み上げた。「今回の私の日本訪問はこれで終わります」と始まるこのメッセージの中で李氏は、日本政府と国民に対し感謝の意を表明し、今回の訪日について「日台両国の静かな強い絆になれたなら成功」とその意義を述べ、最後に「日本がますます国際的に、またアジアで最も発展するよう祈っています。さようなら」と締め括った。このメッセージは産経新聞記者の手を経て司馬夫人に届けられたが、日本人として胸が締め付けられる思いである。「感謝の旅」とも評される所以だ。

午後、京都駅を午後二時四十八分発の「はるか三七号」で離れる李氏一行をおよそ百二十人がお見送り。ご夫妻は座席

に着いた後も窓越しに手を振り、人々に笑顔で応えた。列車が動き出すと歓声は一際高くなり、万歳の声に送られて関西国際空港へ向かった。

午後四時過ぎ、関西空港駅に到着の李氏一行を出迎えたのは、コンコースに溢れ出んばかりに集まった六百人の大群衆が打ち振る日の丸、台湾旗の波。満面の笑みをたたえ、ソフト帽を振りながら歩みを進める李氏。轟音のような「台湾万歳」「李登輝先生、万歳」の大合唱。全国各地から集まった日本人や在日台湾人に応えて何度も大きく手を振った。

そして、突如湧き起こった「蛍の光」の大合唱。日本政府が今まで台湾に対して行ってきた数々の不義理とは対極の位置にある盛大な見送りの光景。台湾でも別離の際に愛唱される「蛍の光」の歌声は、日本人の心の声を乗せ、階下の車に向かう李氏の耳にきつと届いたに違いない。

一行が乗り込んだ午後五時二十分発の日本アジア航空EG二一七便は、澄んだ夜空に吸い込まれるかのごとく飛び立っていた。

無事に帰国した台北国際空港では、陳唐山外相や羅福全・前駐日代表らをはじめ、千二百人を超える支持者が李氏らを出迎え、李氏は日本各地でたくさんの方の日本人、在日台湾人から盛大な歓迎を受けたことを報告した。

李登輝先生、またの訪日をお待ちしています。